アダム・スミスのアジア社会経済論

Adam Smith on Asian Society and Economy

八幡　清文
Kiyofumi YAHATA

はじめに

18世紀はヨーロッパにおいて非ヨーロッパ地域への関心がそれ以前の時代にも増して高揚し、ヨーロッパ以外の諸地域に関する多様な情報が紹介されるだけでなく、それらの地域について様々な論議が巻き起こった時代であったが、アジアはそうした論議においてアメリカ大陸とならんで主要な対象の一つとされた地域であり、多くの著作家によるアジア論が発表された。そうした時代の思潮は、当時にあっては最大限にグローバルな視野で構想されたと言ってよいアダム・スミスの経済学にも鮮明に読み取ることができるのであって、スミスの『国富論』の各所にはアジア諸国の歴史や現状についての独自の認識が展開されている。スミスの経済学の著作の正確な書名は『諸国民の富の性質と諸原因に関する一研究』であり、ここでの「諸国民」は単にヨーロッパの「諸国民」だけでなく、非ヨーロッパ地域の「諸国民」をも意味しているが、それには当然に多くのアジアの諸国民も含まれているのである。

スミスが『国富論』を執筆し、公刊した18世紀後半のアジアでは、中国の清朝が最盛期にあり、インドはムガル帝国期、日本は江戸時代中期にあった。スミスはこの三国をアジアの発達した主要国と見なしている。けれども当時のアジアは、近代の初期以来その地に進出してきたヨーロッパ諸国の勢力が増大しつつある

時代でもあった。とりわけイギリス（グレート・ブリテン）はプラッシーの戦いで勝利してフランスをインド亜大陸から放逐して以後、ベンガル地方を主たる拠点にしたインド支配を拡大しつつあった。グレート・ブリテンのインドでの勢力拡大はムガル帝国の衰退の裏返しであったが、すでに以前から東南アジアに拠点を築いていたスペイン、オランダとともに進むヨーロッパ諸国のアジアでの勢力拡大に対して、中国と日本は貿易や人的往来の制限政策によって対応したことはよく知られている。スミスと同時代人であったドイツの哲学者カントは、『永遠平和のために』（1795年）で、日本では後に「鎖国」と呼ばれた、そうした往来制限政策を「賢明であった」[(1)]と評している。こうした評価は、カントがヨーロッパの商業国民について「彼らがほかの民族を訪問する際に（訪問することは、彼らにとって、そこを征服することと同じことを意味するが）示す不正は、恐るべき程度にまで達している」[(2)]と述べて、ヨーロッパ諸国による非ヨーロッパ地域への進出に対して厳しい視線を向けていたことの結果であるが、そうした視線はまたスミスにも見出すことができる。本稿ではこうした点にも留意しつつ、ヨーロッパの経済的・軍事的な進出の激浪にしだいにさらされつつあったアジアの社会と経済をスミスがどのように認識し、分析しているかを、中国とインドを中心に考察することとする。

1. ヨーロッパから見たアジアとアメリカ

スミスが近代初頭のヨーロッパによるアジアへの交易路の開拓を、アメリカ大陸への到達とならぶ極めて重大な意義をもつ歴史的事件として認識していることは、「アメリカの発見と、喜望峰経由での東インド航路の発見とは、人類の歴史に記録された最大かつ最重要な二つの出来事である」（WN626/訳(3) 234）と述べて、その歴史的意義を最大級に認めていることに端的に表現されてい

る。だがしかし、これはスミスがアメリカ大陸とアジアはヨーロッパから見た場合に類似性をもつ地域であったと把握したことを意味してはいない。スミスは、この二つの地域が、ヨーロッパから見て未知の部分を多く含んでいる点では共通していても、同時に基本的に異なる発達段階にある社会であったことを次のように強調する。

> 東インドという一般的な名称のもとに包括されている諸地方のいくつかはもとより、アフリカにも、野蛮な諸民族が住んでいる。だがそれらの民族は、惨めで無力なアメリカ人ほど無力かつ無防備では決してないばかりでなく、そのうえ、彼らが住んでいる地方の自然的肥沃度のわりには、はるかに人口が多かった。アフリカにせよ、東インドにせよ、最も野蛮な民族は牧畜民族で、ホッテントットでさえそうであった。ところがアメリカのどの地方の原住民もメキシコとペルーを除いて狩猟民族であるにすぎず、肥沃度の等しい同面積の地域が扶養できる牧畜民族と狩猟民族との差は極めて大きい。したがってアフリカと東インドでは、原住民を追い払い、もとの居住者たちの土地の大部分にヨーロッパ人の植民農園を広げることは、アメリカの場合よりも困難であった（WN634/訳(3) 248-249）。

この文章を理解するためには、まずスミス自身が「東インドという一般的な名称のもとに包括されている諸地方」と表現しているように、スミスが「東インド」と言う場合、当時の使用法にしたがってインド亜大陸だけでなくインドシナ半島の大部分やインドネシアをも含めていること、さらに「東インド諸地方、とくに中国やインドスタン」（WN223/訳(1) 357）という表現に見られるように、アジアのほとんどが含まれるほどに広範囲な意味で使用している場合さえあることを念頭におく必要がある[(3)]。スミスは、

そうした広大な意味での東インドの「諸地方のいくつか」に住んでいるのは、アフリカと同様の「野蛮な諸民族」（barbarous nations）であるとする。こうした言明が、近代のヨーロッパは「野蛮」ではなく一つの「文明」であるとする意識の反映であり、ヨーロッパの「文明」の眼鏡で眺めた東インドの諸民族のイメージであることは言うまでもない[4]。また、ここでは明言されてはいないけれども、こうした言明の背後には、インド亜大陸はここで言われる「諸地方のいくつか」には入らず、そこに住む住民は単なる「野蛮な諸民族」ではないとする認識があるが、それについては後に触れるであろう[5]。スミスはしかし、これら東インドの一部とアフリカの「野蛮な諸民族」が、メキシコとペルーを除くアメリカの原住民と同様に「野蛮」であるとは認識しているのではない。スミスはアフリカや東インドの「最も野蛮な民族」でも牧畜民族であるとする一方で、メキシコとペルーを除くアメリカの原住民は狩猟民族であるとし、両者を対照させているからである。両者は「野蛮」である点では同様でも、それの内実は決して同一ではないと認識されている。

スミスによるこうした対照は「4段階理論」[6]と呼ばれる社会進歩の段階的把握を下敷きにしたものである。ヨーロッパの18世紀は歴史への関心が強まった時代であり、近代ヨーロッパを独自の文明とする時代意識の高揚を背景に、ヨーロッパだけでなく異なる文化や生活様式をもつ他の諸地域も含めて世界の諸民族を人類の進化の系列に位置づけようとする諸種の歴史理論が提起された。スミスの「4段階理論」もその一つであり、スミスが『法学講義』で詳細に展開し、『国富論』でも再説している社会発展論においては、人間社会は生業の様式において狩猟、牧畜、農業、商業の4段階の進化をたどるとされる。したがって牧畜段階は狩猟段階よりも進化した段階ということになる。そう判断する理由を、スミスは上の引用で「肥沃度の等しい同面積の地域が扶養で

きる牧畜民族と狩猟民族との差は極めて大きい」と語っている。つまり牧畜段階と狩猟段階を大きく区別するのは、同一の面積で比較した場合、前者の人口維持力が後者よりも格段に大きいという点である。だが牧畜段階の人口が狩猟段階を大きく上回ることは、多くの畜群を財産として所有する人物が狩猟段階よりも大きく増加した人口を支配する力を所持しうることを意味するから、畜群という財産の所有者は必然的に政治的な権力を所有することになるであろう。だからスミスは「財産の不平等が起こりはじめ、以前には存在しえなかった程度の権威と従属を人々の間に導入するのは、社会の第二期である牧畜民の時代である。それは、そうすることによって、それ自体を維持するのに必要な国内統治をある程度導入する」（WN715/訳(3) 381-382）と述べて、牧畜段階では「財産の不平等」の発生を背景に人々の間に「権威と従属」の関係が生成し、それを基盤として狩猟段階にはなかった統治関係が成立すると断定する。ただこの統治は「ある程度導入」されるものであるから、いまだ原初的な統治であるにすぎないが、それでも牧畜民族は狩猟民族よりは強力となるはずである。スミスは東インドやアフリカに住む「野蛮な諸民族」がアメリカの諸民族ほど「無力かつ無防備では決してない」と述べているけれども、人口が多くしかも統治権力によって統率された諸民族の抵抗力が大きいのは当然の結果であり、だからこそ「アフリカと東インドでは、原住民を追い払い、もとの居住者たちの土地の大部分にヨーロッパ人の植民農園を広げることは、アメリカの場合よりも困難であった」とされるのである。

スミスはまた、アフリカおよび東インドとアメリカとにおけるヨーロッパ人の進出の状況を比較して、「ヨーロッパ人は、アフリカの海岸や東インドに多数の重要な定住地を所有しているけれども、まだそのどちらの地方にも、アメリカの島々や大陸に見られるような、人口が多く繁栄している植民地を建設するには至っ

ていない」（WN634/訳(3)248）と断定している。スミスは、ここで述べている「定住地」（settlements）を他の箇所では「植民地」（colonies）とも表現しているから、この文章はヨーロッパがアフリカや東インドに植民地を保有していないということではなく、それが「定住地」と呼びうるほどささやかなもので、アメリカのような「人口が多く繁栄している植民地」になりえていないということを語っている。そしてスミスはその理由を、アフリカと東インドにはアメリカよりも進化した段階の原住民が住んでいることに求めているわけである。

以上の検討によって明らかとなったのは、スミスには東インドの一部の地域にはアメリカよりも進化してはいるが、なお「野蛮」と言いうる諸民族が住んでいるという認識が見られることであるが、スミスは他方で、アジア全体を見ればそうした「野蛮」な状態どころではない程度に発達をとげている諸民族もまた存在することを十分に洞察し、それを次のように語っている。

> アメリカには、どれかの点で、野蛮人にまさる民族は二つしかいなかったし、これらの民族はほとんど発見と同時に絶滅させられてしまった。その他は単なる野蛮人であった。ところが、中国、インドスタン、日本の諸帝国は、東インドの他のいくつかの国と同じく、メキシコやペルーよりも豊かな金銀鉱山こそもっていなかったが、他のどの点でも、メキシコやペルーよりもはるかに富み、よく耕作され、すべての技術や製造業において進歩していた。この両帝国の昔の状態に関してのスペインの著作家たちの誇張された話は、明らかに信用に値しないが、かりにわれわれがそれを信用するとしても、なおかつそうなのである。ところで、富裕で文明化した諸国民は、未開人や野蛮人と交換するよりも、つねにはるかに大きな価値を、相互に交換することができる（WN448/訳(2)292）。

ここでもスミスは、アメリカとアジアのいくつかの国を比較考察し、それぞれの特性を説明しようとしている。まず、スミスがここでアメリカに住んでいた「野蛮人にまさる民族」と言及するのが、メキシコのマヤとペルーのインカのことを指すことは明らかである。スミスはこれら二つの国を「両帝国」と呼んでいるから、それらの過去の状態に関するスペイン人たちの報告は「明らかに信用に値しない」としながらも、両国がかつては盛大な国であったことは認めているのであろう。だがスミスは同時に、両国がヨーロッパによる発見とほとんど同時に「絶滅させられてしまった」としているから、スミスはヨーロッパの植民地となった現在のアメリカ大陸にはかつて存在した「両帝国」から引き継がれているものは絶無であると見なしていると考えられる。

だが、この一節でスミスが最も語ろうとしているのは、アメリカとの対比でアジアには野蛮をはるかに超えた国が存在するという点である。スミスは中国、インドスタン、日本の三国を「帝国」と呼んでいるが、この引用文からはスミスがそれらの帝国をメキシコやペルーにかつて存在した帝国よりも経済的にはるかに発展し、ヨーロッパとともに「富裕で文明化した諸国民」と見なしていることが読み取れる。この点は、スミスがスペインによって征服される以前のメキシコやペルーの経済状態について次のように描いていることを見るならば、さらに明瞭となる。

> スペイン人による征服以前には、メキシコにもペルーにも、荷車をひかせるのに適した家畜はいなかった。ラマは彼らの唯一の駄獣であったが、その力はふつうの驢馬よりもかなり劣っていたようである。彼らには犂は知られていなかった。彼らは鉄の使用を知らなかった。彼らは鋳貨をもたなかったし、どのような種類の確立された商業用具ももたなかった。彼らの商業は物々交換で行われた。一種の木製の踏み鍬が彼らの主な農業

用具であった。とがらせた石が物を切るナイフや手斧として使われ、魚の骨やある種の動物の硬い腱が縫い針として使われていた。そしてこれらのものが彼らの主な職業用具だったようである（WN568/訳(3) 132）。

スミスが「野蛮人にまさる民族」と認めるかつてのメキシコ人やペルー人でさえ、農業などの産業の技術や商業においてはいかに原始的な状態にとどまっていたかが、ここに鮮明に語られている。これら二国では「商業」は存在するものの、それは「物々交換」という貨幣経済以前の段階にとどまっていたとされている[(7)]。スミスはアメリカにはかつてアジアと同様に「帝国」と呼びうる国が存在したことを承認しながらも、経済発展の度合いにおいてアジアの諸帝国とアメリカのかつての両帝国との間に雲泥の差を認めていることは明らかである。だが、アジアにこのようにアメリカよりもはるかに発展した、「富裕で文明化した諸国民」がいくつか存在することは、アジアが大きな購買力をもつ地域であることを意味するであろう。それはつまりアジアがヨーロッパから見て少なくとも潜在的には巨大な市場となりうるということである。スミスの「東インドは、ヨーロッパの製造品にも、アメリカの金銀やその他いくつかの生産物にも、ヨーロッパとアメリカを合わせたよりも大きくて広い市場を提供している」（WN632/訳(3) 245）という判断は、こうしたアジアの経済規模の大きさへの明敏な洞察を背景に述べられている。だが他方でスミスは「ヨーロッパは、これまでのところ、アメリカとの商業からよりも、はるかに少ない利益しか、東インドとの商業から得ていない」（WN448-449/訳(2) 292）とも述べている。つまりヨーロッパの対東インド貿易は、その巨大な潜在的な可能性を実現しえてはいないのである。けれどもスミスは、その原因をヨーロッパが東インドで、アメリカにおけるように「人口が多く繁栄している植民

地」を保有していないこと、その意味で東インドをアメリカほどに征服していないことに求めてはいない。スミスは「ヨーロッパの大国民はどれも、東インドとの自由な商業の利益を得たことがない」(WN449/訳(2)293)と言明しているから、スミスがヨーロッパの対東インド貿易が対アメリカ貿易ほど利益をもたらさない理由を、「自由な商業」を妨げている重商主義的な貿易体制に見ていることは明らかである。スミスの眼から見れば、ヨーロッパの対東インド貿易の現状は巨大な潜在的な機会の実現を妨害している重商主義政策の弊害が最も集約的に露呈している好個の事例なのである。

2. アジア史における文明

以上の考察によって、スミスが、ヨーロッパが世界に進出を開始した近代の初期には、アジアでは最も野蛮な民族でも牧畜民族であったのに対して、アメリカでは大部分の民族は狩猟民族にすぎなかったから、アジアとアメリカは歴史的進化において明確に異なる段階にあり、アジアには近代のヨーロッパから見ても文明的で富裕な諸国が存在すると認識していることが示されたであろう。けれどもアジアの繁栄に対するスミスの注目は近代以降に限定されたものではないことは看過されてはならない。実のところスミスには、アジアの経済発展が近代以降にはじめて進んだことではなく、その一部には大方のヨーロッパ諸国以上に非常に古くから産業の発展が見られたとする認識が存在するのである。

そうした認識は、古代における初期の経済発展に関するスミスの論述に見ることができる。スミスは「最も信頼できる歴史書によれば、最初に文明化したと思われるのは地中海の沿岸周辺に住む諸国民であった」(WN34/訳(1)47) と述べている。スミスがここで言及している「文明化」とは産業発展のことであるが、スミスはさらに「地中海沿岸のすべての国のうち、エジプトは、農業

または製造業をかなりの程度に開発し改良した最初の国であったように思われる」（WN34-35/訳(1)47）と論じて、エジプトを古代世界で最初に産業発展を実現した国であったとする。そしてそれに続けて「農業と製造業における改良は、東インドのベンガル諸州と中国の東部諸省のいくつかで、〔エジプトと〕同じように、大昔から行われていたようである。もっとも、こうした古代の大きな範囲は、世界のこの部分でわれわれがその権威を確信しているどの歴史書によっても確証されているわけではないが」（WN35/訳(1)48、括弧内は引用者）と、幾分の留保をつけながらも、インドのベンガルと中国の一部ではエジプトと同様に早期から産業の発展が見られたとしている。つまりスミスは、アジアの一部の地域は、エジプトとならんで、世界で最も早くから経済発展が始まったと理解しているのである[(8)]。

ここで注意すべきことは、スミスが古代のエジプト、東インド、中国における最初期の産業発展を単に偶然的に生起した出来事と捉えてはいないことである。古代の産業発展に関する論述は、「分業は市場の広さによって制限されるということ」と題された『国富論』の第１編第３章に現れる。分業の発達は、第１編第１章で生産力の拡大すなわち産業発展の主要因とされていたから、スミスは古代の産業発展史を考察することで、その分業の発達を制約する主因である市場規模の拡大の条件を探り出そうとしているのである。

スミスは「水上運送によって、陸上運送だけが提供しうるよりも広範な市場が、どの種類の産業にも開かれるから、あらゆる種類の産業が自然に細分され改良され始めるのは、海岸や航行可能な河川の沿岸であり、そうした改良が国の内陸地方に広がるのは、ずっと後になってからであることが多い」（WN32/訳(1)44-45）と述べる。この文章には、産業立地に関するスミスの基本命題と呼びうる原理が語られている。この文章における「あらゆる種類

の産業が自然に細分され改良されはじめる」という表現は社会的分業の発達による産業の発展を意味するが、この一文からスミスが社会的分業を発達させる大きな要因を交通の発達による様々な地域間のネットワークの拡大に認めていることが明らかである。スミスはこうした交通網の発達の利益を前提として、水上運送のほうが陸上運送よりも「広範な市場」を開くことで分業の発達にとってより貢献できるとし、その結果として沿岸地域が産業発展において内陸地域に先行すると主張する。ただし、スミスがここで「広範な市場」で言おうとしているのは、必ずしも水上運送によって陸上運送が不可能な多くの地域が結びつけられるということ、すなわち輸送網の地理的拡大のことではない。スミスはロンドンとエディンバラ間の水上輸送と陸上輸送とを比較して「6ないし8人が、水上運送のおかげで、同一期間に、ロンドン－エディンバラ間を、100人の御者が乗り、400頭の馬が引く50台の広輪の馬車が運ぶのと同量の品物を往復させることができる」（WN33/訳(1)45）と述べて、水上輸送のほうが陸上輸送よりも実質的にはるかに低コストであると計算し、水上輸送の優位性を強調する。水上交通の利便性はコスト面でも絶大であり、それゆえそれは市場の拡大を通した分業の発達にとって効果が大きいとされる。

先に見たように、スミスが「最初に文明化したと思われるのは地中海の沿岸周辺に住む諸国民であった」と断定しているのは、古代にあっては地中海がこうした水上輸送のもつ利益を最大限に実現できる海であったと評価するからである。造船技術も航海術も幼稚であった古代には広大な大洋への航海は困難であったから、干満がなく、海面がおだやかであるなどの諸条件に恵まれた地中海は海上輸送に適した海であり、そのため沿岸諸国の国民を水上交通で結びつけて一つの市場圏を形成することができたのである。古代の地中海地域における産業の先駆的発展は、水上輸送の利益の恩恵を受ける沿岸地域が産業発展において内陸地域に先

行するというスミスの産業立地の命題が立証された歴史的実例なのである。

けれどもスミスは、エジプトについては、それが他の地中海沿岸地域に先駆けて産業発展をとげた理由を、海上輸送の利益に求めようとはしていない。エジプトは、地中海がもたらす海上輸送の恩恵を最も享受したがゆえに産業発展において先頭を切ったとはされていないのである。というのも、スミスの理解では「古代エジプト人は海を迷信的に嫌悪していた」（WN682/訳(3) 331）から、地中海を利用した海上交易には積極的ではなかったからである。エジプトが産業発展において先行できた主たる原因はナイル河のもつ性質にある。下部エジプトではナイル河は多数の水路に分かれ、下部エジプトにある多くの都市、村落などを結ぶ水上運送の便を提供している。したがって「この内陸航行の範囲と容易さとが、おそらくエジプトの早期の改良の主要な原因の一つであった」（WN35/訳(1) 48）とされる。古代エジプトにおいても産業の先駆的発展を可能にした主因は水上輸送の利便性であるが、それは海上輸送ではなくナイル河がもつ内陸航行の利便性であった。古代エジプトでは、ナイル河が地中海に代替する役割を果たし、産業発展を可能にしたのである。

本稿の主題はスミスのアジア観であるが、古代のエジプトや地中海における産業発展について多少立ち入って考察したのは、スミスが古代の東インドのベンガルや中国の東部諸省における産業発展も、エジプトと同様の条件のもとで生起したと理解しているからである。エジプトの産業発展の基盤はナイル河の下流に形成された多数の水路であったが、東インドや中国においても産業の早期の発展を可能にした事情は何ら異ならない。その点をスミスは「ベンガルでは、ガンジス河や他のいくつかの大河がエジプトでのナイル河と同じように、多数の航行可能な水路を形成している。中国の東部諸省でも、いくつかの大河が、様々な支流によっ

て、多数の水路を形成し、また相互に連結することによってナイル河またはガンジス河のどちらよりも、あるいはおそらく両者を併せたものよりも、はるかに広範な内陸航行を可能にしている」（WN35/訳(1)48）と明快に指摘している。古代のエジプト、東インドのベンガル、中国の東部諸省は、早期の産業発展が大河のもとで形成される多数の水路における内陸航行を基盤とする市場圏を背景にして実現したという共通点をもつ地域である。これは古代の産業発展が水上交通の発達によって形成された市場圏を基盤とする地域間分業によってもたらされたという洞察であるが、これは後にアルフレッド・マーシャルが提起した古代産業発展論を先取りしている[9]。スミスは古代に最初期の産業発展を実現した三つの地域に共通する条件を分析することによって、「分業は市場の広さによって制限される」という、分業の発達と市場の規模との関連についての自己の洞察を歴史的に例証していると考えられる。スミスが古代産業発展史論を、分業の発達が市場規模によって制限されることを論じた『国富論』の第1編第3章で展開しているのは何ら偶然ではないのである。

これまでの考察で触れたように、スミスが古代のエジプトについて「農業または製造業をかなりの程度に開発し改良した最初の国であったように思われる」と述べ、また古代インドのベンガル、中国の東部諸省でも「農業と製造業における改良は、東インドのベンガル諸州と中国の東部諸省のいくつかで、〔エジプトと〕同じように、大昔から行われていたようである」としていることは、スミスがこれら三つの地域における古代の産業発展を農業と製造業に見出し、それらの地域の繁栄が外国貿易に依存したものであったとは認識していないことを示唆する。スミスがこれらの地域における古代の産業発展の基盤を、海上交通の発達ではなく大河のもとで形成された内陸航行の発達に見出していることも、それを裏付けている。スミス自身、「古代のエジプト人も、インド

人も、中国人も、外国商業を奨励せず、みなその大変な富裕をこの内陸航行から得たらしいことは、際立っている」（WN35/訳(1) 48）と言明している。こうした認識について、スミスは『国富論』の第２編第５章でも、資本の投下は農業、製造業、外国貿易の三つの目的からなされることを説明した後で、次のように語っている。

> どこかの大国が、以上三つの目的のすべてにとって十分な資本を獲得できるほど、人間の繁栄が長く続いたことは、事実、めったになかったように思われる。われわれが中国や古代エジプトの富と耕作について、また古代インドスタンの状態についての、驚くべき説明を信用するのでないかぎり、おそらくそうである。どの説明によっても、かつて世界に存在した最も富裕な国であるこの三国でさえ、農業と製造業の優越によって主として知られているのである。それらの国は外国貿易で傑出していたようには見えない。古代エジプト人は、海に対して迷信的な反感をもっていたし、ほぼ同種類の反感はインド人の間にも広がっている。また中国人が外国商業で卓越していたことは一度もない。それら三国のすべてで余剰生産物の大半がつねに外国人によって輸出されていたようで、彼らはそれと交換に、そこで需要される何か別のものを与えていたが、それはしばしば金と銀であった（WN367/訳(2) 169）。

スミスはこの一節で、古代のエジプトとインドスタン、また中国については古代に限らず、それら三国を「かつて世界に存在した最も富裕な国」と表現し、それらが実現した経済的繁栄に最大級の評価を与えている。エジプトとインドスタンが古代の繁栄に限定されているのに対し、中国にはそうした限定がなされていないのは、中国が現在も巨大な経済規模をもつ国であるという判断

によると見られるが、この点については後に論ずるであろう。スミスが古代エジプト人は海を迷信的に嫌悪したと捉えていることは先に触れたが、スミスはこの一節では、エジプト人とインド人はともに海への「反感」から、中国人の場合には貿易が不得意だったことにより、これら三国が「外国貿易で傑出していたようには見えない」と断じている。もちろんこの一節の末尾ではこれら三国が余剰生産物を他国の物産と交換する貿易を行っていたことが述べられているから、三国は封鎖的な経済のもとで繁栄をとげたとはされていないけれども、輸出の大半を外国人に委ねていたとされている。ただスミスは「古代エジプトの富、中国とインドスタンの富は、たとえ自国の輸出貿易の大半が外国人によって行われても、一国民が極めて高度な富裕を達成できることを十分に証明している」（WN379-380/訳(2) 189）と述べ、外国人への輸出の委託は何ら富裕への障害とはならないことを強調する。と同時にこれら三国のかつての繁栄は、それらの国民自身が外国貿易に卓越していたために実現したものではなく「農業と製造業の優越」を基盤として実現したと理解されている。

これら三国がかつて最高度の富裕を実現した産業発展像は、ヨーロッパにおける近代の産業発展史としてスミスが描く行程とは、大きく異なっている。スミスは「富裕の自然的進歩について」と題された『国富論』第3編第1章で一国における産業発展の本来の順序について論じ、各産業への投資の順序はそれぞれの産業の必要性の程度や投資の安全性の考慮に基づいて決まるとして、「物事の自然の過程によれば、あらゆる発展しつつある国の資本の大半は、まず農業に、のちに製造業に、そしてすべての最後に外国貿易に向けられる」（WN380/訳(2) 189）と結論したうえで、「物事のこの自然の順序は……ヨーロッパのすべての近代国家では、多くの点で完全に転倒されてきた」（WN380/訳(2) 189）と断定する。というのは、スミスはヨーロッパの経済発展は、「物事

の自然の過程」とは逆に、まず中世後半のいくつかの都市の外国貿易から始まり、この貿易の発展によって導入された遠隔地販売向けの製造業――スミスはそれを「外国商業の子孫」（WN407/訳(2)228）と呼ぶ――の発達の結果として農業の改良が実現したという歴史的事実を踏まえているからである。もっともスミスは、遠隔地向けの製造業の発達とは別に、農業の豊富な余剰生産物を基盤とした国内の地域的市場への販売から出発してしだいに洗練をくわえて外国へ輸出しうる水準に到達した製造業――スミスはそれを「農業の子孫」（WN409/訳(2)232）と呼ぶ――もあったと認めている。けれども同時に「ヨーロッパの近代史では、それらの製造業の拡大と改良は、外国商業の子孫である製造業よりも一般に遅れていた」（WN410/訳(2)232）と述べて、近代ヨーロッパにおいては外国貿易の興隆によって先導されて製造業さらには農業と産業発展が実現してきたと認定しているのである。

スミスはエジプト、インド、中国のかつての産業発展と繁栄が「物事の自然の過程」に沿って実現されたとは明言してはいないけれども、国内の大河のもたらす多数の水路のもとで発達した内陸航行を基盤とする「農業と製造業の優越」を実現し、外国貿易の大半を外国人に委ねながら達成した繁栄は、外国貿易の興隆が先行して実現する富裕ではありえず、結果的には「物事の自然の過程」によって成立するはずの産業構造がもたらす繁栄に合致するであろう。スミスはエジプトなど三国のかつての繁栄と栄光に、「物事の自然の過程」の実現に近似した経済発展を発見していると言いうる。これを別の視点から見れば、スミスはエジプトなど三国のかつての繁栄を高く評価することによって、「物事の自然の過程」に反した産業発展をたどってきた近代のヨーロッパの経済史に対する批判を意図していると解釈することができる。スミスの古代産業発展史論は単なる懐古的な関心の産物ではなく、近代ヨーロッパの産業発展過程に対する批判的関心に基づいている

ことが明らかである。

このように分析するならば、スミスがアジアを歴史的にアメリカ大陸には見られない発展をとげた地域として認識していることが理解できよう。インド、中国は、エジプトとともに、古代から独自の産業文明が発達した地域として把握されているのである。

3. アジア史における「野蛮」

前節において考察したのは、スミスがアジア史の中に発見した「文明」の部分であるけれども、これはスミスのアジア観のすべてを表現するものではない。スミスはアジアには偉大な文明とともにそれと対極にある「野蛮」が存続してきたことを凝視し、それにも少なからぬ関心を払っているからである。つまりスミスはアジア社会を「文明」と「野蛮」との両面から観察しているのであるが、スミスがアジア史の「野蛮」について語るさいに焦点をなしていると思われるのがタタール民族である。タタールは、アジア史の研究では一般に中央アジアで主として活動したモンゴル系の遊牧民族とされているけれども、ヨーロッパでは「タタール」は多様な民族を含む名称として使用された言葉であった。スミスも「タタール」をかなりあいまいで広範な意味で使い、古代ゲルマン人について「彼らもおそらくスキタイ人またはタタール人の子孫であった」（WN704/訳(3) 365）と述べ、古代ゲルマン人がタタールであった可能性さえ指摘している。タタール民族はスミス以前にヨーロッパでまったく注意を引かなかったわけではなく、例えばフランスのモンテスキューがスミスよりも前に、『法の精神』（1748 年）で何度かタタールに触れている[(10)]。スミスも非常に広い意味で理解したタタールがアジア史において及ぼした影響に相当の注意を払っていることは、『国富論』だけでなく『法学講義』でも何度もタタールに言及していることに見てとれる。

スミスは「アフリカのすべての内陸地帯、黒海とカスピ海のか

なり北方にあるすべての地帯、つまり古代のスキタイと近代のタタールおよびシベリアは、世界のすべての時代に、現在われわれがみるのと同じ野蛮で非文明的な状態にあったように思われる」（WN36-37/訳(1) 48-49）と述べて、タタール族が住む世界が現在に至るまで「野蛮で非文明的な状態」にある地帯の一つであることを強調する。この一文は、インドのベンガルや中国の東部諸省でも古代エジプトと同様に早期から産業発展が見られたことを述べた文節に続く一節の最初の文章であり、それはスミスが古代から文明化をとげたエジプト、インド、中国とは対照的なタタールの永続的な「野蛮」と「非文明」性を強調しようとしていることを示している。スミスはタタールが長く非文明的な状態にとどまってきた理由を、その地域の海が航行できない凍結した大洋であることに加えて、そこを流れる大河が遠く隔たっているためにそれらを結ぶ商業の発達が困難であるという自然条件に求めている。厳しい自然条件のもとで生きてきたタタールは、スミスにとってはアジアに存在する「野蛮」な要素を象徴する民族なのである。

とはいえ、これはタタール人が世界各地のどの民族よりも未開な状態にあるということ意味するものではない。スミスの社会進歩の「4段階理論」においては、狩猟民であるアメリカ大陸の多くの原住民は第1段階にあるが、タタールはアラブ人とともに牧畜民として第2段階に位置づけられる[(11)]。これは、タタールが近代に至るまで牧畜以外の生業をまったく知らずにきたということではない。スミスは「タタールやアラビアの首長の収入は、利潤である。それは主として彼自身の牛群や羊群の乳や増殖から生じる」（WN817/訳(4) 118）と述べているが、この言明はタタール人が畜群や乳を販売して利益を得る商業を行っていることを暗示する。また、スミスがヨーロッパ人の進出する以前のメキシコとペルーについて、「手工業や農業や商業において、その住民が現在のウクライナのタタール人よりもはるかに無知であった」

（WN221/訳(1) 353）と述べているのは、少なくとも近代のタタール人の一部は「手工業や農業や商業」について一定の知識をもち、かつてアメリカ大陸で帝国を築いたメキシコ人やペルー人ほど産業に関して「無知」ではないことを認めていると解される。さらにスミスは「タタール人のあいだでは、貨幣を使うことが一般に知られていない他のすべての牧畜民族の場合と同様、家畜が商業の用具であり、価値の尺度である。したがって富とは、スペイン人によれば金銀だったように、彼らによれば家畜であった」（WN430/訳(2) 260）と述べているから、歴史の経過とともにタタール人の世界にも商業が出現したことは認識している。すでに見たように、スミスはかつての帝国のメキシコとペルーで存在した「商業」が物々交換であったとしているが、タタール人の世界では「商業の用具」を用いていたとしているから、その面でもタタール人はアメリカ大陸の原住民よりも進化していたと認識しているのである。ただし、それは貨幣ではなく家畜を交換手段とする商業であるから牧畜民の段階に相応する未開な商業にすぎないと把握していることも明らかである。つまりスミスの理解では、タタールの商業は貨幣を使用する文明的な商業ではなく、したがってそれはタタール人の牧畜民という「野蛮」状態からの脱却を意味するとはされていない。

すでに論及したように、スミスによって狩猟民と牧畜民が社会進化の異なる段階にあるとされる主たる理由は、所有の成立と統治の生成において両者の間に明白な質的差異があると把握されていることによる。というのも「狩猟民族の間では、ほとんど財産はないし、あったとしても２日か３日の労働の価値を超えることはない」（WN709/訳(3) 374）から、狩猟民の社会は財産所有なき世界であるが、統治は財産の発生が引き起こす不平等のもとで富者を貧者から防衛するために生成するものであるから、それはまた統治が確立していない世界でもある。だが前述したように、牧

畜民の世界では明確な所有とその不平等の発生を背景に原初的ながら統治関係が開始され、しかもタタールには未開ながら商業も存在するのであるから、タタールの社会は中国やインドのような「文明」の世界ではないけれども、狩猟民族と比べれば「文明」に近い「野蛮」の性格をもつ世界であるということになる。

スミスがアジア史に見出す特徴は、原初的な統治体制にあるタタール人が、より発達した統治制度をもつアジアの国々以上に歴史の激動因となってきたことにある。その背景として、スミスは「社会の第２期、すなわち牧畜民の時期には、財産の極めて大きな不平等の余地があり、財産の優越がその所有者にそれほど大きな権威を与える時期は、他にない。したがって権威と従属がこれほど完全に確立される時期は、他にない。アラビアの酋長の権威は極めて大きいし、タタールの汗の権威はまったく専制的なものである」（WN713/訳(3) 379）と述べ、他のどの社会段階よりも大きな財産の不平等を基盤とするタタールの統治者がもつ権力を「専制的」と形容して、その権力が社会の他のどの段階にもまして大きいことを強調する。つまりタタール人における統治関係が原初的であることはその権力が弱体であることを意味するわけではなく、むしろ逆にそれは「専制的」なほどに強力であり、そうした「専制的」な権力によって指揮されるタタール人の組織的な活動力は絶大なものとなるということである。スミスがタタール人の特性としてとくに注目するのはこの組織的な活動力、とりわけ強大な軍事力であり、タタール人はその軍事力によってアジアを揺り動かしてきたとするのである。そうした認識は、例えば次のように語られる。

> 狩猟民族が、近隣の文明諸国民にとって恐るべきものであることは決してありえない。牧畜民族はそうでありうる。北アメリカのインディアンの戦争ほど取るにたりないものはありえな

い。反対に、アジアにおけるタタール人の侵入がしばしば恐ろしかったのにまさるものはありえない。ヨーロッパもアジアもスキタイ人が統一したら抵抗できないだろうという、トゥキュディデスの判断は、あらゆる時代の経験によって証明されてきた。スキタイやタタールの広大ではあるが無防備の平原の住民は、ある征服者集団または氏族の首長のもとに、しばしば統一された。そしてアジアの破壊や荒廃は、つねに彼らの統一を示すものであった。もう一つの大牧畜民族であるアラビアの苛酷な砂漠の住民は、マホメットとその直接の後継者たちのもとで、ただ一度しか統一されたことがない（WN691-692/訳(3) 346）。

この一節からは、まず、直接には述べられていないけれども、スミスが牧畜民族を狩猟民族と同じく、「文明諸国民」と見なしてはいないことが改めて確認できる。また、牧畜民族が狩猟民族のそれとは隔絶した戦争能力をもち、それゆえにタタール人がスキタイ人と同様に「近隣の文明諸国民」にとって大きな脅威となり、実際にしばしば「アジアの破壊や荒廃」をもたらしてきたことが明言されている。さらに、先に見たように、アラビアの酋長の権威はタタール人の汗と同じく極めて大きいにもかかわらず、タタールやスキタイのようには統一がなされなかった理由が、スキタイやタタールが広大な「平原」であるのに対して、アラビアが「苛酷な砂漠」であるという自然条件に求められている。「平原」という自然条件にも恵まれて民族の統一がアラブ人よりも容易であったタタール人は、スキタイ人と同様に強大な軍事力を最大限に発揮することで、アラブ人以上に「アジアの破壊や荒廃」をもたらす最大の勢力となったとされている。スミスがタタールをアジアの「野蛮」の象徴として言及するのは、単にタタールの生活様式が未開であるということだけでなく、タタールがその絶大な軍事力によってしばしば「アジアの破壊や荒廃」をもたらしたと

いう認識による[12]。こうした認識は、モンテスキューがタタールについて「彼らはアジアをインドから地中海にいたるまで破壊した」[13]と述べているのに一致する。タタールによる「破壊や荒廃」については、特に13世紀のモンゴルによる遠征がロシア史において「タタールのくびき」[14]として記憶されているが、それと同様のタタール観がモンテスキューやスミスにも見られるのである。

だが、スミスはタタールのアジアにもたらした影響を甚大な「破壊や荒廃」だけに認めているのではない。スミスがタタールに少なからぬ関心をはらっているのは、その民族がアジアにおいて単なる「破壊や荒廃」を超える深刻な歴史的影響を残したと理解しているからなのである。だからスミスが文明国と野蛮国の民兵を比較して「文明国民が自国の防衛について民兵に依存しているときには、たまたまその近隣にいる野蛮国民によって征服される危険につねにさらされている。アジアの文明諸国がすべてタタール人によってしばしば征服されたことは、野蛮国民の民兵の文明国民の民兵に対する自然の優越性を、十分に証明している」（WN705/訳(3)369）と述べるとき、タタールによるアジアの「征服」を単にアジアの「野蛮」がアジアの「文明」に「破壊と荒廃」をもたらしたという意味で語っているのではない。タタールによるアジアの「文明諸国」の「征服」という表現の背後には、それが「破壊と荒廃」を超える深大な結果、すなわちアジアの基本的な社会制度への決定的な刻印を残したとする認識が存在するのである。ただ、スミスはその認識を『国富論』では具体的に語ってはいないので、それを解明するためには『法学講義』を検討する必要がある。

スミスは、『法学講義』Aノートでは『国富論』よりも明瞭に、タタール人が残した歴史的足跡を次のように語っている。

タタール人は、その国土が乾燥していて海面より高く位置し、若干の大河を除いてはほとんど川がなく、その気候はどんな穀物の栽培にも寒すぎるという性質をもつことからしてつねに牧畜民であったし、今後もつねに牧畜民であろうから、また彼らは……一人の首長の下に容易に団結しうるから、世界の大きな諸変革は、他のどの民族よりも彼らから生じたということがわかるのである（LJA220/訳A228）。

この一節の解釈においては、すでに触れたように、スミスが「タタール」という言葉を時代的にも地域的にも非常に広い意味で用いていることを再び想起しなければならない。スミスは、タタールが生んだ代表的な征服者としてチンギス・カンとティムールを挙げているけれども、スミスが言う「タタール」には彼らよりもはるかに古い時代の民族も含まれる。例えばスミスは、古代にキュロス王によって率いられてメディアを蹂躙したペルシャ国民がタタールであり、そのメディア人ももともとはタタールで、さらにペルシャを蹂躙したパルティア人もタタールであったとしている。スミスはそのように広く解されたタタールが、牧畜民では強力な統治者に率いられる組織力を発揮できることにより、他の諸民族以上に「世界の大きな諸変革」を引き起こしたと断定している。スミスは『法学講義』Bノートでも「つねに牧畜民であったアラブ人とタタール人は、多くの機会に最も恐るべき破壊を行った。タタールの首長は極度に恐るべきものであり、その一人が他の首長を打ち破ったときには、最も恐ろしく激しい諸変革が起こる」（LJB408/訳B49）と述べている。これらの文章で言われている「大きな諸変革」や「最も恐ろしく激しい諸変革」は「アジアの破壊と荒廃」にとどまるものではない。確かにスミスは「未開民族の一つであるタタール人は、何度もアジア全土を侵略し、ペルシャを12回侵略した」（LJA157/訳A162）と述べてタタール

の侵略性を強調しているけれども、これはアジアの家族制度における結婚制度について論ずる文脈で出現する文章であり、これのすぐ前では「野蛮で未開の諸民族の征服が、現在多妻制が行われているすべての国民にそれを生み出した」（LJA156/訳A161）と言明されている。だからスミスがここで言おうとしているのは、タタール人が「何度もアジア全土を侵略」することで、自らの結婚制度である多妻制をアジア諸国に定着させたということなのである。スミスは多くの東方諸国では一妻制のヨーロッパとは異なって多妻制が行われているとしているから、ヨーロッパとは異質なアジアの社会制度の一つである結婚制度がタタールの征服に由来していると理解しているのである。

スミスはさらに、アジアの政治制度にもタタールの影響が強く作用していることを見出す。アジアの政治制度はおしなべて君主政治であるが、スミスは「東方諸国における君主政治はすべてタタールやアラブの首長たちによって樹立された」とし、続けて「現在のスルタン、グラン・セニョール、ムガル、および中国の皇帝は、すべてタタール人の子孫である」（LJA241-242/訳A253）と断言する。タタールもアラブも牧畜民であるから、アジアの君主政治は牧畜民の統治形態を基礎に成立したということである。スミスはこうした由来をもつアジアの君主政治が、古代ローマで共和制の後に成立した帝政と本質的な差異をもつことを指摘する。両者はともに軍事的な君主政であるという点では共通性をもつが、古代ローマで君主政治をしいた皇帝はそれ以前の共和制の時代に制定された法律の効果を感じていたのでそれを廃止しなかったが、東方の君主たちは「法律の恩恵については無知であり、それゆえ古い法律を継続させたり、新しい法律を制定することなどは考えもおよばなかった」（LJA242/訳A253）のである。スミスがこうした比較によって主張するのは、古代ローマでは法治主義に基づく君主政が成立したのに対して、アジアでは法治主義の伝

統を伴わない君主政が成立したということである。だからスミスはアジアの皇帝たち「自身の権威は完全に絶対的だった」（LJA242/訳A253）と述べることで、アジアの君主政が古代ローマの帝政には見られないほどに「絶対的」な統治体制であったことを強調しているのである。

こうしたアジアの「完全に絶対的」な統治がタタールなどの牧畜民の統治の影響によるものであることは明らかである。スミスは近代の社会では贈り物を受け取ることは従属と劣等のしるしであるが、未開の社会では反対にそれは他者が自己の権力へ服従することの証とされるため、「すべての野蛮民族においては、何人も贈り物をもっていかなければ首長に謁見することができない。これはムガル人、タタール人、およびアフリカとアメリカのすべての民族のあいだでの習慣である」（LJA212/訳A220）と述べて、タタールを含む野蛮民族における統治者の権威が絶大であることを指摘する。こうした習慣にも表現されているように、牧畜民の統治者は強力な支配をふるうが、これは正式の法に基づいて行使される支配ではない。スミスは「なるほど家畜の所有が出現し始めるや否や、ある種の法が存在するに違いない。けれどもこれは非常に簡潔なものにすぎず、文節もごくわずかなので、成文の法もしくは正規の法がなくても誰でも理解できただろう」（LJA213/訳A221）と述べて、社会の牧畜段階では家畜の所有に伴ってそれを規制する一種の法が生成するとしても、それは「成文の法もしくは正規の法」とはほど遠いものであるとする。つまりチンギス・カンやティムールに代表されるような牧畜民の首長は強大な権力をふるって大帝国を樹立したが、それはまったく法に基づく権力による征服ではなかったとされる。スミスが『国富論』でタタールの統治者の権力は「専制的」であり、社会の他のどの段階よりも強大であると主張していることはすでに見たが、『法学講義』では彼らの権力が正規の法に掣肘されないほど絶大であるこ

とが強調されている。ここに明らかなように、牧畜民において成立する統治体制がいかに強力であろうとそれが原初的なものであるのは、それが確固とした法に基づく統治ではないからなのである。スミスは、牧畜民のこのような意味で「専制的」な統治が牧畜民の征服によって樹立されたアジアの「完全に絶対的」な君主政治の土台となっていると分析している。スミスは、後にカール・ウィットフォーゲルによって「東洋的専制主義」(15)と呼称されたアジアの伝統的な君主政の根源を、牧畜民であるタタールの統治様式に求めているのである。

このようにスミスは、タタールをアジアに「破壊と荒廃」をもたらした主勢力と把握する一方で、タタールによる征服が結婚制度や統治制度においてアジアに決定的な影響を残したと理解している。すでに触れたように、スミスは「アジアの文明諸国がすべてタタール人によってしばしば征服された」と言明しているが、これはアジアを征服したタタールの「野蛮」がアジアの「破壊と荒廃」の原因であっただけでなく、アジアの「文明」にも多大な影響を残したとする認識の表明となっている。タタールの歴史的影響を抜きにしてアジアの社会と文明を理解することはできないというのがスミスのアジア論の基本認識なのである。

4. アジア主要国の経済の現状

すでに考察したように、スミスにはアジアの一部地域では古代の早期から産業発展が進んだ文明国が存在するとする認識を指摘できる。なるほど前節で論じたように、スミスがアジアの文明国はたびたびタタールによる破壊に見舞われてきたことをアジア史において逸することのできない事実として重視していることは明白である。だが、スミスはタタールの度重なる侵略や征服がアジアの主要国の産業基盤まで掘り崩したと把握しているのではない。すでに見たように、スミスが近代の初期にアジアに進出した

ヨーロッパにとってアジアにはアメリカ大陸にはない経済規模をもつ文明国が存在したとしているのは、アジアの産業水準に対するスミスの高い評価を反映したものであろう。実際、スミスは『国富論』を刊行した18世紀後半における観察として、「中国とインドスタンは製造業の技術と勤勉では、ヨーロッパのどの地方よりも劣っているが、極めて劣っているとは思われない」（WN224/訳(1)358）と述べて、インドスタンと中国における「製造業の技術と勤勉」の現在の水準がヨーロッパには及ばないものの、大きく後れをとっているわけではないと言明している。スミスの時代にあっても、古代以来のアジアの産業基盤は連綿と存続しているとする認識が見られるのである。これが当時のアジアの経済事情を過大評価したものではないことは、ヨーロッパの東インド（すなわちアジア）貿易では、すでに17世紀後半頃から当時の18世紀まで、またさらに19世紀に入っても長く、ヨーロッパの入超が続いたという事実から確認できるであろう[16]。

このようにスミスは、インドスタンと中国では「製造業の技術と勤勉」が現在もヨーロッパと同等ではなくともそれに近い水準で保持されていると評価するけれども、他方で両国がヨーロッパに近い経済発展を現在でも続けていると捉えているわけではない。スミスは現在のヨーロッパとインドスタン、中国との間には、経済成長の進展度において大きな差異が見られることを強調するのであり、そうした認識は労働賃金を論じた『国富論』第1編第8章で端的に語られる。スミスはその章で諸国の経済を進歩的、停滞的、衰退的の3類型に分類し、それぞれの状態における賃金水準を分析している。進歩的状態は経済のプラス成長が続く状態であり、それによる国富の増大は労働への需要の増加をもたらすから労働者の高賃金が実現する。停滞的状態は経済がほとんどゼロ成長の状態であり、そこでは国富が増大しない結果として労働需要が大きくないため賃金は低水準となる。衰退的状態はマイナ

ス成長の状態であり、そこでは国富が減少するから労働者の賃金も低下せざるをえない。したがってスミスの分析では諸国の賃金水準はその国の経済の成長度と強い相関関係をもつことになる。

スミスは諸国の経済の進歩的、停滞的、衰退的状態への分類を単に理論的想定として提起しているのではない。それはむしろ当時の世界の諸地域の経済事情の広範な観察に基づいてなされた分類であり、それぞれの状態にはモデルとも言うべき地域が想定されている。スミスは進歩的状態にある代表的な例として北アメリカのブリテン領植民地を挙げている。この植民地は現在の経済成長が最速である結果として抜きんでた高賃金が実現しているとされる。しかしこれはこの地域だけが進歩的状態であるということではない。スミスは「アメリカの発見以来、ヨーロッパの大部分は大いに改良された」（WN220/訳(1)362）と述べ、また「グレート・ブリテンでの労働の貨幣価格は、確かに今世紀を通じて上昇した」（WN218/訳(1)348）とも言明しているから、グレート・ブリテンを含むヨーロッパの多くの国も進歩的状態にあると見なしていると考えられる。しかしその一方で、アジアの中国、インドは進歩的状態とはほど遠い経済事情にある国として描かれる。スミスのそうした認識は、中国について「この国は長い間、停滞状態にあったように思われる」（WN89/訳(1)130）と断定し、さらに「すべての旅行者の話は、他の多くの点では一致していないが、中国における労働の賃金の低さや労働者が家族を養育することの困難さについては一致している」（WN89/訳(1)130）と、中国では家族の扶養が困難なほど低賃金であると主張していることだけでも容易にうかがえる。またインドについては、スミスは「ベンガルやその他の東インドのブリテン植民地」を「破滅した諸国」（WN111/訳(1)168）と呼び、その原因を「その社会の全資本の減少、つまり勤労の扶養にあてられる基金の減少」（WN110/訳(1)167）に求める。それらの国が資本の減少によってマイナス成

長におちいった結果、労働賃金が生存可能な最低水準にまで低下しても「多くの人々はこうしたきびしい条件でさえ雇用を見つけることができず、飢えるか、あるいは乞食をするなり極悪非道を犯すなりして、生計を求める」（WN91/訳(1)132）という極度の悲惨が出現しているというのである。これこそ衰退的状態を意味する現象であり、スミスはベンガルなどの東インドの一部地域を産業基盤が発達した国の中では最も劣悪な経済状態にある地域の典型と見なしている。以下では、このような中国、インドにおけるヨーロッパ、北アメリカ植民地とは対照的な経済事情とその背景がスミスによってどのように分析されているかについて、さらに考察を進めよう。

スミスは中国経済が長期にわたって停滞していると主張しているけれども、同時にスミスの時代でも中国が巨大な経済規模を誇る国であることも強調している。スミスの「中国の国内市場は、おそらく、広さの点で、ヨーロッパの様々な国のすべてを合わせた市場にあまり劣らないだろう」（WN681/訳(3)329）という判断は、スミスが中国経済をいかに巨大な存在と認識しているかをあます所なく語っていよう。スミスは中国経済がそれほど巨大であることを、特に製造業の発達に関して、中国という国の特性から次のように説明する。

> 製造業の完成がまったく分業に依存するということは、忘れてはならない。そしてどの製造業にせよ、そこに分業が導入されうる程度は……必然的に市場の広さによって規制される。しかし中国という帝国の広大な面積、その膨大な数の住民、その気候の多様性、したがってまた様々な属州の生産物の多様性、それらの属州の大部分の間の水路による交通の容易さが、あの極めて広大な国の国内市場を、それだけで極めて大きな諸製造業を維持し、労働の著しい細分を許すほどのものにしているの

である（WN680-681/訳(3) 329）。

スミスが中国の一部地域ではエジプト、インドスタンと同様に、古代の早期から産業の発展が見られたとし、その背景を巨大な河川の下流における内陸水運の発達に求めていることは、本稿で見たところである。またスミスは、『国富論』の冒頭の数章で、生産力の発展の主因は分業の発達にあり、さらにその分業の発達の程度は市場の規模によって制約されると説いている。ここに引用した箇所では、スミスはそれらの所説を前提としつつ、中国の産業を高度に発展させた要因として、三つの要因すなわち中国の膨大な人口を背景とする市場の巨大さ、広大な国土に由来する地域の多様性、多様な地域を結ぶ内陸水運の発達を挙げている。中国は大国であるがゆえに産業の発展に必要な諸条件を兼ね備えたまれな国であり、それらの諸条件の相乗効果によって製造業の発展を遂げたとされている。

スミスはまた「中国はヨーロッパのどの部分よりもはるかに富んだ国であり、中国とヨーロッパでの生活資料の価格差は極めて大きい。中国の米はヨーロッパのどこの小麦よりもはるかに安い」（WN208/訳(1) 330）と述べ、中国は巨大な生産力をもつ結果として食料がヨーロッパよりも安価であるとも主張する。にもかかわらずスミスが中国の民衆の生活水準をヨーロッパに及ばないと判断するのは「中国とヨーロッパとの労働の貨幣価格の差は、生活資料の貨幣価格の差よりもさらに大きい」（WN209/訳(1) 331）と見ているからである。このように中国では生活資料の価格がヨーロッパよりも安いにもかかわらず生活水準がヨーロッパに及ばないのは労働賃金がそれ以上に低いためであり、それこそ中国経済が停滞的状態にあることの結果に他ならない。貨幣賃金を決定するのは労働の需要と供給の関係であり、国富が増大しない停滞的状態では労働需要が増加しないため賃金上昇は困難であるか

ら、「一国の富が極めて大きくても、もしその国が長い間停滞的であるならば、われわれはその国で労働の賃金が極めて高いことを期待してはならない」（WN89/訳(1) 129）というわけである。長期の停滞的状態は、国の経済規模は抜きんでて巨大であるにもかかわらず、労働者の家族の扶養が困難なほどに一般民衆の生活水準は非常に低いという中国経済の逆説的特徴の根因なのである。

18 世紀はヨーロッパで中国への関心が高まった時代であり、中国趣味（シノワズリ）が広く流行する一方で、世紀の中葉頃にはヨーロッパとの比較から中国社会の停滞を指摘する議論が広まった[17]。スミスの中国経済論が当時のそうした論調に掉さす側面をもつことは否定できない。とはいえ、スミスは経済の停滞的状態を中国の宿命と理解しているのではない。スミスは中国の長期の経済的停滞の原因について次のように述べている。

> 中国は長い間、停滞していたように見えるし、おそらくはずっと以前に、同国の法律や制度の性質と両立するかぎりの富の全量を獲得したのだろう。しかしこの全量は、別の法律や制度があれば、その土壌や気候や位置でできるかもしれないものに、はるかに及ばないだろう。対外商業を無視または蔑視し、外国船の入港を 1、2 の港にしか認めない国は、異なる法律や制度によればできるかもしれないのと同量の事業を行うことはできない。また富者ないし大資本の所有者は大いに安全を享受しているけれども、貧者ないし小資本の所有者はほとんど安全を享受せず、いつでも正義という口実で下級官吏の略奪や収奪を受けやすい国でも、様々な事業部門のすべてにおいて使用される資本の量は、その事業の性質と規模が許すかもしれない量に等しくは、決してなりえない（WN111-112/訳(1) 169-170）。

この一節には、中国の経済の長期の停滞の原因とともに、停滞

的状態を打破するための方策も示唆されている。スミスは中国の長期の経済的停滞について、ここでは中国が「ずっと以前に、同国の法律や制度の性質と両立するかぎりの富の全量を獲得した」ことが原因であるとしている。つまり中国の経済の長期的停滞は、その経済自体の潜在力が涸渇してしまったことによるのではなく、その国の伝統的な「法律や制度」がすでに「ずっと以前」からさらなる経済成長の桎梏となっているからなのである。しかしそれは、従来からの「法律や制度」が変化すれば、中国は停滞的状態を脱却してさらに経済成長が可能となることを意味するであろう。スミスはここでは、中国の経済成長を阻んでいる制度として二つ挙げているが、それらはスミスの経済成長論の一側面としても考察に値する。

本稿の第2節で、スミスが中国人は伝統的に貿易に卓越してはいなかったと見ていることに触れたが、この一節では中国が貿易を「無視または蔑視」する結果として強力な貿易制限をしていることが経済の停滞の大きな要因とされている。ただしこれは、中国でスミスが『国富論』で厳しい批判を展開した重商主義政策が実行されたということではない。それはあくまで貿易への「無視または蔑視」という中国人の伝統的観念の発現であり、それが結果的に近代のヨーロッパ諸国で実施されてきた貿易制限に類似する政策となったということである。スミスは『国富論』の他の箇所でも、「中国人は外国貿易をほとんど尊重していない。……日本に対しては別だが、中国人は自分で、また自国の船で、ほとんどあるいはまったく外国貿易を行っていないし、外国船の入港を認めることさえ、彼らの王国の1、2の港に限っている」（WN680/訳(3) 328）と、中国の強力な貿易制限政策を強調している。しかしスミスの眼から見れば、重商主義政策の撤廃がヨーロッパ諸国のさらなる経済発展につながるように、中国による貿易の開放はその国の経済的停滞を打破し、新たな発展をもたらすことは確実

なのである。そうしたスミスの見解は、先に言及した中国の抜きんでた市場規模に関する一文に続いて、「この大きな国内市場に世界の残りすべての外国市場をつけ加えた、いっそう広範な外国貿易は、とくにこの貿易のどれでもかなりの部分が中国の船舶でなされるならば、中国の製造品を大幅に増加させ、その製造産業の生産力を大幅に改良させることは、ほとんど間違いないだろう」（WN681/訳(3) 329-330）と断言していることに表明されている。

スミスは中国の長期の経済的停滞を招いている第2の要因として、中国では「富者または大資本の所有者」つまり上層階級が「大いに安全」を享受しているのに対して、「貧者ないし小資本の所有者」が「安全」をほとんど享受せず、「いつでも正義という口実で下級官吏の略奪や収奪を受けやすい」という社会構造、すなわち下層民衆がつねに苛酷な「略奪や収奪」にさらされているという民衆抑圧の社会制度の結果、経済活動で利用される「資本の量」に限界が存在することを挙げている。すでに本稿の第3節で、スミスが『法学講義』で中国を含むアジア諸国に極度の専制政治を発見していることに論及したが、スミスがここで叙述している中国の民衆抑圧と搾取の構造は、まさに中国の専制政治と表裏一体となった社会制度であると言ってよい。スミスがヨーロッパにおいては中世の封建制度が崩壊して勤労民衆が封建領主の支配と収奪から解放されて自立を進め、自己の手元に富を蓄積するようになったことが近代的な経済発展の起点となったと認識していることは、すでに別稿で論じたところである[18]。したがってスミスはここでは、近代ヨーロッパの経済発展の歴史的基盤を想起しつつ、中国における専制的な支配体制が民衆のもとにおける資本の蓄積を阻害することにより、中国経済の成長に対する強固な桎梏となっていることを指摘していると考えられる。すでに見たように、スミスの理解では中国は古代に最も早く産業発展が見られた地域の一つであり、またその後でも大規模な市場を基盤として

巨大な経済規模を実現した国であるが、その専制的な社会制度はすでに成長への強大な壁となって長期の停滞を招いているのである。

このようにスミスは中国における長期の経済的停滞の主因を、伝統的な貿易観に由来する強力な貿易制限政策と苛酷に民衆を抑圧する専制的な社会制度に求めることによって、中国が経済の停滞的状態を脱却するためには貿易政策の転換と社会制度の根本的な改革が必要であることを示唆しているのである。

次にスミスのインド経済観の考察に進むが、スミスはインドについては中国ほど多くを語っていないし、インドのことを東インド、インドスタン、ベンガルという範囲の異なる様々な地域名で読んでいるため、考察は必ずしも容易ではない。まず、スミスがインドのベンガル地方を、エジプト、中国の一部の省と同様に、古代に早期から産業発展が進んだ地域としていること、またその産業発展が外国貿易を奨励した結果ではないと理解していることは、すでに見たところである。スミスはこれらの地域の主権者が伝統的に採ってきた産業政策として、「中国の政策は他のすべての職業よりも農業を優遇している」（WN679/訳(3)327）と述べた後に「古代エジプトの政策もまた、そしてインドスタンのヒンドゥー教徒政府の政策も、他のすべての職業より農業を重んじていたようである」（WN681/訳(3)330）と言明し、それら三つの地域の政府は伝統的に農本主義的な政策を採用してきたとして、その理由をこれらの国の主権者の財政収入が地租に大きく依存していたことに求めている。しかしスミスは主権者たちのこうした政策の結果として、これらの国が農業国として発展したということを主張しているのではない。むしろスミスはこれらの国では農業だけでなく製造業の発達も見られたことを強調する。そのさいスミスは古代のエジプトとインドスタンを比較して、両国ではともに外国貿易に消極的であったため外国市場に限界があったけれども内陸水運の発達が国内市場を発達させたと述べたうえで、「イ

ンドスタンの面積の広大さもまた、同国の国内市場を極めて大きなものとし、多様な製造業を支えるのに十分なものとした」（WN682/訳(3) 332）のに対して、国土の狭いエジプトでは国内市場は狭小であったため製造業の発達は限定的であったと指摘する。つまり中国と同様に大国であるインドスタンは、古代エジプトよりもはるかに農業だけでなく多様な製造業も顕著に発達した国であり、そうした認識に立ってスミスは「通常最も多量の米を輸出するインドスタンの一属州であるベンガルは、穀物の輸出よりも、つねに極めて多様な製造品の輸出でいっそう際立ってきた」（WN683/訳(3) 333）と、インドスタンの中でもとくにベンガルが輸出用製造業の拠点であり続けてきたと主張している。

スミスによるベンガルの製造品についての具体的な説明は乏しく、わずかに17世紀から18世紀にかけてヨーロッパへの東インドの物品の輸入が激増したことに言及した箇所で、その一つとして「ベンガルの布地」（WN223/訳(1) 356）を挙げている[19]。ただ、この例だけでも、スミスがベンガルの工業の隆盛に注目していることがうかがわれるであろう。ところがすでに見たように、スミスは経済の衰退的状態の実例として「ベンガルやその他の東インドのブリテン植民地」を挙げ、それらを「破滅した諸国」とさえ呼んでいるのである。しかしこれまでの考察からすれば、ベンガルの「衰退」をその地域の内発的要因によるものと理解するのは困難であろう。なるほどスミスは「古代のエジプトでもインドスタンでも、国民全体が様々なカーストまたは部族に分かれ、そのそれぞれは子々孫々、特定の職業もしくは特定種類の職業に閉じこめられていた」（WN681/訳(3) 330）と述べ、インドスタンではカースト制という強固な身分制度が国民の自由を剥奪してきたことに眼を向けている。そうした身分制度はもちろん経済発展にとって有利な条件ではないけれども、だからといってスミスはその身分制度が原因でインドスタンの経済が破滅に向かいつつある

と認識しているわけではない。むしろスミスはベンガルについては、古代以来の強固な身分制度が存続していても、内陸水運の発達などの好条件に恵まれるならばヨーロッパへ大量に輸出しうるほどに製造業が発達しうることを立証した地域として注視していると考えられる。

衰退的な経済状態にあるとされる「ベンガルやその他の東インド」の国が「ブリテン植民地」であることは、衰退の原因が東インドの社会制度自体にはなく、むしろ当時それらの地域を植民地化しつつあったグレート・ブリテンの統治にあることを示唆している。スミスの時代にグレート・ブリテンのインド進出を担ったのは東インド会社であったが、この会社は他のヨーロッパ諸国が設立した東インド会社と同様に、アジア貿易の独占権を保有していただけでなく、スミスの時代には進出地の統治権をもしだいに獲得するに至っていたため、スミスはこの会社を企業と主権者との二重の性格をもつ組織として論じている。だが、独占的な貿易会社が統治権をも有すると、その会社と社員たちの私的な独占的利益のために公的な行政を利用することになるから、「商人たちの排他的な会社の統治は、およそどのような国にとっても、おそらく、あらゆる統治のうちで最悪である」（WN570/訳(3) 136）。東インド会社のそうした悪政の一つとして、スミスはムガル帝国の時代のベンガルにおける徴税制度では税の物納の代わりとして軽い代納金が認められていたのを、東インド会社の一部の使用人が物納に戻したことを取り上げ、「この変更は、耕作を阻害するとともに、公収入の徴収にさいして不正をはたらく新しい機会を与えることになりがちであり、公収入は、初めてこの会社の管理下におかれたときに得られたと言われていた額よりも、はるかに下まわることになった」（WN840/訳(4) 160）と批判している。こうした事例を背景に、スミスはオランダとイングランドが設立した東インド会社を比較して、オランダ東インド会社がこれまで支

配地で行ってきた種々の抑圧と破壊に言及した後で、次のように述べるのである。

> イングランドの会社はまだ、それほど完全に破壊的な体制をベンガルで確立するだけの時がたっていない。しかしながら彼らの統治方式は、まさにこれと同じ傾向をもってきた。……この会社の使用人たちは、様々の場合に、その国の外国貿易だけでなく、国内商業についても、その最も重要な部門のいくつかに、自分たちの利益になる独占を樹立しようと企てた。……1、2世紀のうちには、イングランドの会社の政策も、このようにして、オランダの会社の政策のように、完全に破壊的なものであることが、おそらく判明しただろう（WN636-637/訳(3)252-253）。

スミスはここでは、グレート・ブリテンの東インド会社がベンガルの統治権を掌握してからまだ日が浅いことを認めながらも、その「統治方式」がすでにオランダと同様の「完全に破壊的」な傾向をもっていると断じている。スミスは、ベンガルを経済が衰退的状態にある国の代表として挙げている箇所で、ベンガルでは労働賃金が極度にみじめな水準にまで低下したことをきっかけに「困窮、飢饉、死亡」（WN91/訳(1)132）が全階級に広がり、人口の減少まで引き起こされたと述べているけれども、これはスミスが東インド会社の統治がすでに「破壊的」な傾向をもつようになっていると判断していることの例証となろう。というのも、人口の減少は食料の払底が最大の原因となるが、スミスは『国富論』の第4編第5章の「穀物貿易と穀物法に関する余論」で、米作の国では旱魃の影響が他の種類の穀物生産国よりもはるかに大きいことを承認しながらも、「そのような国々でさえ、もし政府が自由貿易を許すならば、旱魃がかならず飢饉を起こすほど全般的で

あることは、おそらく、めったにないだろう。数年前のベンガルの旱魃は、たぶん、極めて大きい食料不足を引き起こすものだったろう。東インド会社の社員たちが米穀貿易に課した不適切な規制や無分別な制限が、おそらく、あの食料不足を飢饉に転じるのに貢献したのである」（WN527/訳(3) 52）と述べて「食料不足」（dearth）と「飢饉」（famine）とを明確に区別した上で、数年前のベンガルで「食料不足」を超えて「飢饉」が発生したのは旱魃の結果ではなく、東インド会社の米穀貿易統制の結果であったと批判しているからである。ベンガルの飢饉と人口減少は、その地の主権者となった東インド会社の植民地政策が現在すでに「破壊的」であることの端的な事例なのである。

スミスのこうした認識は、本稿の「はじめに」で触れたカントが、ヨーロッパの商業国家のアジア進出について「東インド（ヒンドゥスタン）では、彼らは商業支店を設けるだけだという口実の下に軍隊を導入したが、しかしそれとともに原住民を圧迫し、その地の諸国家を煽動して、広汎な範囲におよぶ戦争を起こし、飢え、反乱、裏切り、そのほか人類を苦しめるあらゆる災厄を嘆く声が数え立てるような悪事をもちこんだのである」[20]と、その諸々の悪行を批判しているのと軌を一にする。カントの『永遠平和のために』は『国富論』よりも後に公刊されたが、カントはスミスの東インド会社批判に直接触れてはいない。だが、スミスの見解がカントに示唆を与えた可能性はあろう。

スミスはすべての植民地政策が植民地に対して同様に「破壊的」であり、それによって植民地の経済が衰退的状態に陥ると主張してはいない。すでに触れたように、グレート・ブリテンの北アメリカ植民地は経済の進歩的状態にある代表例であり、その地は本国の重商主義政策による貿易統制にもかかわらずヨーロッパ諸国を上まわる急速な経済発展をとげつつあるとされている。このことが示すように、スミスはグレート・ブリテンが各地の植民地で

実施している植民地政策をひとからげに扱ってはいない。スミスは「北アメリカを保護し統治するブリテンの政治機構の精神と東インドで抑圧と圧政をこととする商事会社の精神との相違を例証するものとしては、おそらくそれらの国の状態の相違にまさるものはありえないだろう」（WN91/訳(1)133）と述べて、経済が進歩的状態にある北アメリカと衰退的状態にあるベンガルとの格差が両地域における植民地政策から大きな影響を受けていると捉えている。もちろんこれは北アメリカにおける植民地政策が重商主義的な精神から自由であったということではなく、ベンガルにおける政策よりははるかに穏健で限定的であったということである。この言明はまた、両植民地政策の二つの「精神」の差を説明するものが統治の主体の差異であることも語っている。すでに見たように、スミスは独占的な貿易会社による統治は「あらゆる統治のうちで最悪である」と断言しているが、ベンガル経済の衰退的状態は独占企業が主権者となることの弊害が露呈された典型的な事例なのである。

以上の考察によって明らかなように、スミスは中国の経済が長期にわたり停滞的状態にある原因を、強力な貿易制限政策と専制的な社会制度という中国自身の内因的側面に求める一方で、ベンガルなどのインドの植民地が衰退的状態にある原因を、その地の社会制度ではなくグレート・ブリテンの植民地政策という外因的側面に見出している。それは、スミスがベンガルなどで東インド会社によって実施されている重商主義的な植民地政策を、他の諸地域で実施されている重商主義政策にもまして不合理で有害な政策であると認識していることを語っている。スミスにとって、ベンガルの現状は商人が主権者でもある最悪の重商主義体制の必然的な所産なのである。

以上のように、本稿では、スミスが『国富論』や『法学講義』で、アジア社会についてどのように論じているかについて、でき

る限り多様な側面から考察してきた。スミスがアジアに関してはタタール、中国、インドに多く論及しているため、これまでの考察では日本についてはあまり触れなかったが、スミスは日本をまったく視野の外に置いているわけではない。そこで補足的になるが、ここでスミスの日本観について見ておこう。

とはいえスミスの日本に関する言及は中国、インドに比べると非常に少なく、『国富論』でもいくつかの断片的な叙述がなされているにすぎない。しかし本稿の第1節で見たように、「中国、インドスタン、日本の諸帝国」という表現に示されている通り、スミスは日本を取るに足らない国と認識しているわけではなく、中国、インドスタンと並ぶアジアの「帝国」と位置づけ、アジアの発達した文明国の一つと捉えていると思われる。日本に関する叙述でまず注目されるのは、世界への銅の輸出国としての日本への関心である。スミスは「日本の銅はヨーロッパで商品となっている」（WN185/訳(1)294）と述べ、さらに「日本の銅の価格は、ヨーロッパの銅山の銅価格に、ある影響を与えるに違いない」（WN185/訳(1)295）と言明している。18世紀は様々な金属がすでにグローバルな商品として盛んに流通していた時代であり、スミスは日本が当時の主要な産出国として銅の世界市場に参入していると認識していることが読み取れる。

スミスの日本に関する言及でもう一つ注目されるのは、中国に関する論述の中で中国と日本の関係に触れている部分である。スミスが中国の長期にわたる停滞的状態の一因を強力な貿易制限に求めていることはすでに見たが、そのさいに引用した文章には「日本に対しては別だが、中国人は自分で、また自国の船で、ほとんどあるいはまったく外国貿易を行っていない」と、中国が例外的に日本とは自国の船で貿易を行っているとする認識を示している部分がある。スミスは日本の当時の江戸幕府による貿易統制政策については語っていないから、それを知っていたかは明らかでは

ないが、もし知っていたならば当然に自由貿易論の立場から批判的な評価を下していたであろう。スミスは中国については、中国が自国の船による貿易を拡大することによって世界の機械と技術と改良を習得するであろうと予想した後で、「彼らの現在のやりかたでは、日本人を手本とする以外には、他のどの国民の手本によっても自分を改良していく機会はほとんどない」（WN681/訳(3)330）と断定している。これもすでに見たが、スミスは「中国とインドスタンは製造業の技術と勤勉では、ヨーロッパのどの地方よりも劣っているが、極めて劣っているとは思われない」と、中国、インドスタンの技術はヨーロッパには及ばないけれども大きな格差は存在しないとする認識を語っている。けれども日本人がその中国人の「手本」になりうるということは、日本の産業技術がヨーロッパと同等ではなくともそれに迫る水準にあると認識していることになろう。こうした点からも、スミスは具体的に述べているわけではないが、18世紀当時の日本を産業がヨーロッパからも侮りがたい水準にまで発達した国と見なしていると推測できる。スミスは中国の「手本」となるほど発達した日本の経済事情に関する一定の知識を背景に、日本をアジアの「帝国」の一つとして挙げていると考えられるのである。

おわりに

スミスが自己の経済学を構想し、『国富論』の刊行へと至った18世紀後半の前期ごろはイギリスでは「産業革命」の直前ないし開始の時代にあたり、スミス自身が語っているように、ヨーロッパは全体としては、すでにそれ以前の時代から順調な経済発展をとげつつあった。しかし、スミスがヨーロッパと中国、インドスタンとの技術格差はそれほど大きくないと見ていることは、その時代にはヨーロッパとアジアの主要国との産業力の格差がまだそれほど開いてないと認識していることを示唆している。ヨーロッ

パには新たな文明の時代が訪れつつあるとする意識が高まり、その影響を受けつつ自己の世界像を形成したスミスから見ても、アジアの主要国は「帝国」と呼びうる産業国であったのである。けれども同時に、スミスがグレート・ブリテンの北アメリカ植民地やヨーロッパの主要国を経済の進歩的状態にあると見なす一方で、中国を停滞的状態、インドのベンガル地方を衰退的状態と特徴づけていることは、ヨーロッパ、北アメリカとアジアの主要国との間には経済の成長力においては明白な格差が生じつつあると認識していることを意味する。アジア主要国の経済は、一面では中国におけるように伝統的な社会制度と貿易政策によって、一面ではインドのベンガルにおけるようにヨーロッパの重商主義的なアジア進出によって窒息状態に陥っていると診断されている。ともに文明が発達した地域ではあるけれども、ヨーロッパの文明は進歩しつつある一方でアジアの文明は停滞しつつあるとする意識が啓蒙期にあった18世紀のヨーロッパで醸成されつつあったが、スミスの経済学で展開されているアジア社会像にもそうした世界像が反映されているのである。そして19世紀以降、ヨーロッパにおいて産業化の波がイギリス以外の国にも押し寄せ、またそうした産業発展を背景にヨーロッパのアジアへの進出が加速するとともに、「進歩するヨーロッパ」と「停滞するアジア」という対比的な評価はヨーロッパではさらに強固となり、ヨーロッパによる世界支配を後押しする世界像となっていくのである。

【注】

＊　本稿では，アダム・スミスの『国富論』として，次の原書と訳書を使用する．Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by R.H. Campbell and A.S. Skinner, 2vols., Oxford U.P., 1976. 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(1)〜(4)，岩波文庫，2000〜2001年．引用においては，引用文の後に，まず原書をWNと表記して引用箇所を示し，その後に訳書の分冊番号と該当ページ数を表

示する．

また，スミスの法学講義は1762-1763年のものと1763-1764年のものとの二種類があるので，慣例に従い前者をLJA，後者をLJBと表記する．『法学講義』としては，二種の講義を収録した次の原書とそれぞれの訳書を使用する．Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence,* ed. by R.L. Meek, D.D. Raphael and P.G. Stein, Oxford U.P., 1978. 水田洋他訳『アダム・スミス法学講義1762-1763』名古屋大学出版会，2012年（LJAの邦訳）／水田洋訳『法学講義』岩波文庫，2005年（LJBの邦訳）．引用においては，まず原書をLJAまたはLJBと表記して引用箇所を示し，その後に各訳書の該当ページを表示する．『国富論』，『法学講義』ともに，訳文は適宜変更してある．引用文中の傍点は，断りのない限り引用者のものである．

(1)(2) I. Kant, *Zum Ewigen Frieden,* 1795, *Kants Werke, Akademie-Textausgabe,* Band VIII, Walter de Gruyter, 1968, S. 359. 宇都宮芳明訳『永遠平和のために』岩波文庫，1985年，49ページ．

(3) スミスが東インドのことを多様な名称で表現し，またそれらが意味する地域が異なっていることについては，水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(1)，116ページを参照．

(4) 近代のヨーロッパ人が非ヨーロッパ地域に対してどのようなイメージをもったかを，18世紀のイギリス人に焦点を当て，多様な資料を渉猟することで浮き彫りにした貴重な研究に次の著作がある．P.J. Marshall and G. Williams, *Great Map of Mankind. British Perceptions of the World in the Age of Enlightenment,* J.M. Dent & Sons, 1982. 大久保桂子訳『野蛮の博物誌　18世紀イギリスがみた世界』平凡社，1989年．

(5) したがって，スミスは直接に述べてはいないけれども，スミスが「野蛮な諸民族」が住んでいるとする東インドの「諸地方のいくつか」は，主に東南アジアを指していると思われる．

(6) スミスの「4段階理論」については，次の研究が論じている．R.L. Meek, “Smith, Turgot, and the ‘Four Stages’ Theory” *History of Political Economy*, Vol. 3, 1971. また，スミスの「4段階理論」と他のスコットランド啓蒙思想家の歴史理論との比較のためには，次の研究が有益である．C.J. Berry, *Social Theory of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U.P., 1997, pp. 93-99.

(7) スミスは，ヨーロッパ人が進出する以前の北アメリカの原住民であった狩猟民族も非常に原始的な経済生活を送っていたとしている．この点については，次の研究を参照．八幡清文「アダム・スミスのグロー

バリゼーション認識」『国際交流研究』（フェリス女学院大学）第 13 号，2011 年 3 月．

(8) スミスは，古代に最も早く文明化が進んだ地域として，現代では古代の「4 大文明」の中に数えられるメソポタミア文明とインダス文明を挙げてはいない．メソポタミア文明は 19 世紀後半に本格的な調査が始まり，インダス文明の存在が知られるようになったのは 20 世紀になってからである．スミスの時代には，両文明はまだ知られていなかったのである．

(9) マーシャルは『経済学原理』（1890 年）の「付録Ａ」で，「初期文明の大部分の発祥地は大河の流域であった．その水利に恵まれた平野はほとんど飢饉に見舞われることがなかった．……大河はまた，単純な諸形態の交易や分業にとって好適な，便利な交通手段をもたらした」と述べている．A. Marshall, *Principles of Economics*, 9th (Variorum) ed., by C.W. Guillebaud, 2vols., Macmillan, 1961, Vol. 1, p. 728. 馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理』全 4 冊，東洋経済新報社，1965 年，Ⅰ，117 ページ．

(10) モンテスキューは世界各地の諸民族について論じているが，タタール人にもかなりの関心を寄せている．『法の精神』の第 3 部第 18 編の第 19 章から第 21 章では，「タタール人」という名称が章の表題に登場する．

(11) 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』では，shepherds がタタールを指す場合には「遊牧民」と訳しているが，本稿では他の箇所との訳語の統一のために「牧畜民」と訳している．

(12) 中央アジアの歴史を規定した背景として，スミスと同様に自然条件に着目した理論に，梅棹忠夫の「文明の生態史観」がある．この理論では，ユーラシア大陸とその周辺部は第一地域と第二地域とに区分され，ユーラシア大陸の大部分を占める第二地域の「特殊性」は，その大陸を斜めに横断する乾燥地帯かその縁辺に成立した文明が遊牧民を主力とする暴力によって何度も破壊される事態，すなわち「建設と破壊のたえざるくりかえし」にあるとされる．梅棹忠夫『文明の生態史観』中公文庫（改版），1998 年，125 ページ．

(13) C.L. de Montesquieu, *De L'Esprit des Lois*, 1748, *Œuvres completes de Montesquieu*, tome II, Gallimard, 1951, p. 542. 野田良之他訳『法の精神』上・中・下，岩波文庫，1989 年，中，132 ページ．

(14) モンゴル帝国の支配を「タタールのくびき」ではなく「タタールの平和」として理解する所説もある．佐口透「タタールの平和」『世界歴史 9』岩波書店，1970 年．「くびき」という表現に代表されるモンゴル民族の

征服への否定的評価に対しては，以下の著作が反論している．杉山正明『クビライの挑戦』講談社学術文庫，2010 年．次の著書は，「タタールのくびき」の歴史的実態を問い直そうとする研究である．栗生沢猛夫『タタールのくびき　ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会，2007 年．

⒂ K.A. Wittfogel, *Oriental Despotism, A Comparative Study of Total Power,* Yale U.P., 1957. 湯浅赳男訳『オリエンタル・デスポティズム　専制官僚国家の生成と崩壊』新評論，1991 年．

⒃ 松井透『世界市場の形成』岩波書店，1991 年，213-216 ページ．

⒄ 近代ヨーロッパで生成した中国停滞論については，次の研究で詳説されている．大野英二郎『停滞の帝国　近代西洋における中国像の変遷』国書刊行会，2011 年．特に第 2 部第 1 章，第 2 章を参照．

⒅ 八幡清文「アダム・スミスのヨーロッパ先進国経済論」『国際交流研究』（フェリス女学院大学）第 14 号，2012 年 3 月．

⒆ スミスがここで挙げている「ベンガルの布地」の中の相当量は，当時「キャラコ」とよばれたインド産の綿布であろう．グレート・ブリテンが「キャラコ」の輸入を厳しく制限していたことは，スミスも『国富論』の第 4 編第 4 章で言及している（WN500/訳⑵ 385）．

なお，スミスは『国富論』第 5 編第 1 章でフランス人 F. ベルニエに言及しているが，この著名な旅行家は 17 世紀後半に訪れたベンガルについて「この世にこんなにも多くの違った種類の品物のある土地が他にあるものかどうか私には分かりません．というのも，すでにお話した，高価な商品に数えることのできる砂糖の他に，綿や絹が，ベンガルはヒンドスタン全体や大ムガル帝国全体ばかりでなく，近隣王国全体やヨーロッパにとっても総合倉庫と言えるほど多くあります」と，その生産力の高さに驚嘆している．ベルニエ『ムガル帝国誌』㈡倉田信子訳，岩波文庫，2001 年，287 ページ．

⒇ I. Kant, *a.a.O.*, S. 358-359. 宇都宮芳明訳，49 ページ．